

# 田中智志・橋本美保『プロジェクト活動——知と生を結ぶ学び』

中 村 頌

## 1. はじめに

『プロジェクト活動：知と生を結ぶ学び』は言うまでもなく、プロジェクト活動についての著作である。著者<sup>1)</sup>自身が「なんとも風変わりな節操のない行論にみえるかもしれない」(p.183)と断っているように、各章で取り上げられる題材こそ多岐にわたっている。しかし、本書は一貫してただ一つのことを語っている。そこでは、「プロジェクト活動」という言語的に表象可能な教育方法の一形態を素材として、それを超えたところにある存在論的な地平<sup>2)</sup>が示されているのである。勿論、「プロジェクト活動」の思想的変遷や海外の動向についての記述も本書の重要なトピックであるが、本書評においてはそこに通底する思想的土台に焦点を当てる。

ここで「存在論的な地平」といわれるときの「存在論」とはどのようなものであろうか。断っておかなければならないのは、著者が「存在論」というとき、アリストテレスに端を発する伝統的存在論からは区別される、ハイデガー的な存在論を意味しているということである。差し当たってここでは、本書の記述にならない、ハイデガー流の存在論を「人を支える基礎存在を語る言説」として理解する(p.162)<sup>3)</sup>。そして本稿は「存在論的地平」という私たちの生の本態そのものについての言説を、プロジェクト活動に見出す。プロジェクト活動の根幹にある専心や協同性が学習の確かな基礎となるのは、そこにおいて「知と生を結ぶ学び」——本書の副題である——が可能となるからである。

それでは、本書で一貫して指し示されている「存在論的地平」とはどのようなものであろうか。そして私たちは、そのような前分節的な地平をめぐる言説にたいして、どのような眼差しを注ぎ、思考を重ねていくことができるだろうか。本稿は第一に、存在論の言説によって明らかにされる地平がどのようなものか、本書に内在的な視点から確認する。そして第二に、本書において基本的には肯定的に語られ

ている存在論的な次元をめぐる視座について、その立場に立脚することにおいて懸念されるディレンマや困難に焦点を当てつつ、検討を加えたい。そこでは、プロジェクト活動に対する肯定的評価を改めて問いなおすことを通して、存在論的地平につらなる本書の言説を補完する。

## 2. 『プロジェクト活動』の描き出す存在論的地平

『プロジェクト活動』は二部構成である。第I部(1～3章)が「プロジェクト活動と知」、第II部(4章～終章)が「プロジェクト活動と生」と題されているように、本書は「知」と、それを支える「生」を二つの軸として議論を進める。まずこの両者の様態を著者がどのように語っているかを確認しよう。

### 2-1 プロジェクト活動と知

著者は、知の様態を「明示知」「暗黙知」「文脈(情況)」の三つに分類する。高度に分節化された表象知を含む「明示知」に対して、「暗黙知」と「文脈」は、分節化の水準が低い知である。特に前分節的な「文脈」は、当人が「気づき aware」ながらも「自覚的 conscious」でない(=言語的に対象化していない)知であるとともに、「明示知」「暗黙知」の基礎となっている。筆者は、ハイデガーの「世界内存在」になぞらえて人を「情況内存在」と呼んでいるが(p.157)、そのことを考えれば分かりやすいかもしれない。私たちは世界という情況(文脈)の網の目のなかで(無自覚的に)自己を了解しつつ存在している。「文脈」とは、一部自覚されることがあるにせよ、基本的には命題化されていないそういった自己自身の立ち位置に関する知のことである(p.16)。

ここで重要なのは、表象知などに代表される分節化された知は、充分には分節化されていない知(「文脈」)によって基礎付けられているということである。野矢茂樹の言葉を借りれば、「言語的に分節化さ

れた体験を、圧倒的に豊かな非言語的体験の場が取り巻いている」<sup>4)</sup>であり、人間の特徴は「非言語的な場に晒されつつ、言語的に分節化された世界に生きる」<sup>5)</sup>という二重性にある。

本書の第Ⅰ部「プロジェクト活動と知」(1～3章)において著者は、プロジェクト活動につらなる実践や思想を取り上げながら、特にプロジェクト活動が可能にする「文脈の拡大」——そこでは生きた経験を土台として、他者や世界と自己との関係が編みなおされ豊かなものとなる——に一つの力点をおきながら、各章を論じている。フィンランドの教育実践を取り上げた第1章、及川平次の分団式教育論をテーマとした第2章、両章において共通するのは、予測不可能性を含みこんだ専心的・動的な活動に大きな価値がおかれているということである。どちらにおいても、命題的に語りうる教育目的をあらかじめ至上のものとして設定し、そこへの準拠を盲目的に志向するような教育的働きかけが否定的に捉えられている。

間違いが生じる余地を残さない教材や機材を選択することに熱心すぎるのが、子どもの独創力を制約したり、判断経験を縮減したり、生活の錯綜した情況からかけ離れた方法を子どもたちに強制することになる(中略)。生活の錯綜した情況では、間違いの余地を残さないで獲得された能力は、ほとんど利用可能性をもたない<sup>6)</sup>。

この意味で、「間違いの余地」を敢えて残すプロジェクト活動(専心活動)は、「試行錯誤・揺動苦悩」という「生の経験」を必然的に伴うものとならざるをえない。しかしながら、この試行錯誤の没入的挑戦を介してこそ、「文脈の拡大」が可能となる。言い換えれば、そこではじめて、知がその人自身の生とつながり、知と世界との連関が拡充深化されるのである。その意味において、専心活動は必ず、「想定外の事態に直面しうまくいかず試行錯誤を常態とする営み」(p.146)とならなければいけない。プロジェクト活動という教育的営みは、表象知という分節化された知の獲得を第一に求めるのではなく、なによりも人の「生の体験」と密接に結びついた前分節的な知の拡大を志向する。「教育における知は、表象知をはるかに凌駕する暗黙知や文脈をふくむものであり、そうした暗黙知や文脈を豊かにすることで、表象知

を豊かにすることができる」のである(p.88)。

前分節的な知を豊かにするものが、「試行錯誤・揺動苦悩」という苦心の経験や「よりよい自己・世界」を志向する倫理的衝迫といった「生の経験」である。第3章では、ヘルバルト、ヘーゲル、デューイらの思想が援用されながら、「学ぶこと」に先立つ「生」の次元の基底性が語られる。「いかなる「像」にも、したがって表象にも収まりきらない過剰」(p.74)としての「生」の経験が、学びを基礎付け知を拡充深化させる。私たちは学校において、言語的に分節化可能な「像」としての表象知を重視しすぎるあまり、私たちの実存を支え私たちのあらゆる知の土壌となる「生の経験」を看過してはいないだろうか。第3章は、「知」の様態をテーマとしていた第Ⅰ部から、「生」の様態をテーマとする第Ⅱ部へと私たちを橋渡ししている。

## 2-2 プロジェクト活動と生——存在論的地平

第Ⅱ部「プロジェクト活動と生」(第4章～終章)においては、「生」の二つの様態である「協同性志向の生」と「有用性志向の生」とが区別されたうえで、教育論として「生(生活)」の次元を語ったデューイの「社会的生活」(協同性)概念(第4章)と、それにつらなる野村芳兵衛の思想(第5章)が取り上げられる。そして、「協同性」を鍵概念とするデューイの教育論、ひいては専心活動としてのプロジェクト活動が、「道具性」や「共存在」という概念に特徴づけられるハイデガーの存在論に結びつくものとして論じられる(6章～終章)。

ここで確認されるように、筆者はデューイ思想を一つの軸として本書を展開している。第二部では特にデューイの「協同性」概念に焦点が当てられているが、そこに見出されているのは有用性に傾斜する機能的思考——そこでは、あらかじめ見定められた目的に向けての意図的・計画的な問題解決が目指される——とは異なる、「生の共鳴連関という世界についての存在論的思考」(p.115)である。意図的・分節的な機能的思考に対して、存在論的思考は非目的合理的かつ非言語的な領域を多分に含んでいる。そして、「存在論的思考は、無意図的・前分節的でありながら、機能的思考を、いわば下から支え、愛他的・倫理的に方向づけている」のである(p.177)。

ここに来てようやく、「存在論的」と形容される「思考」が登場した。これまで言及されてきた「専心」

「共存在」「前分節的」という三つの概念をもとに、本書が描き出す存在論的な地平についてまとめよう。

〈1. 専心〉 本書は、表象知をはるかに凌駕する非言語的な「文脈」を拡充深化すること、すなわち他者や世界との関係を編みなおすことをプロジェクト活動の本義とし、そのような「文脈の拡大」を可能にする世界との関わりとして、「専心」を説いた。それは、よりよいものを目指す敢然性を土台として対象へと没入的に関わることであり、ハイデガーの言葉を借りるなら、「道具的存在者（手許存在）」としての対象との関係のなかに参入することである。

そうした専心活動は常に間違いをおかしているものであるため、試行錯誤・揺動苦悩といった「生の体験」を不可避免的に伴う営みであった。「専心」をめぐる本書の思想は、「情況内存在」としての人間が、そのただなかで生を全うしていかなければならない「文脈＝情況」に焦点をあてながら、「人を支える基礎存在を語る言説」としての存在論的な地平を描き出している。

〈2. 共存在〉 また本書は、ハイデガー存在論における鍵概念である「共存在」を、デューイの「協同性」の概念に結びつけながら、私たちの生の本態として描いている。「協同性」は、私たちに相互扶助的關係を強要する「規範」ではなく、あるいは、有用性を求めた機能的思考に基づく「協働」でもない。それは、共存在としての私たちに立ち現れてくる「予感」である。私たちは共存在として、よりよき他者・世界との関係を求める「愛他の意志」という倫理的衝迫を通して、他者とかかわる。

愛他の意志は、他者への無条件の贈与享受、純粹な共鳴共振という衝迫——この傷んでいる人を助けたい、この人とともに生きたい、この人に寄り添いたいといった衝迫——に発する。(p. 172)

生の本態は、この愛他の営みであり、「共存在」(être avec/Mit-sein) という存在論的様態として人びとが生きていることである。(p.177)

プロジェクト活動は、「共存在」という私たちの生の本態を暗示する。共存在としての他者によって支えられるとともに、自らが共存在として他者や世界へ

の倫理的衝迫に動機づけられるなかで、プロジェクト活動における専心活動も可能となる。そして同時に、その専心活動が「経験を深め、文脈を広げ、自分と他者の緊密なつながりを暗示し、他者存在の承認と応答を支える礎になる」のである (p.164)。

〈3. 前分節的〉 存在論的な地平とは、必然的に前分節的なものであり、事後的にのみ表象可能なものである。なぜなら存在論は、いかなる表象にも収まりきらない過剰としての「生」を語る言説であるからだ。教科書的な「知識」としての表象知は、私たちの「生の体験」と不可分な「文脈」という非言語的な知によって基礎づけられている。有用性を思考する目的合理的な機能的思考もまた、無意図的・前分節的な存在論的思考によって方向づけられている。その意味で、私たちが学びにおいて、高度に分節化された表象知の獲得のみを目指す限り、その学びは私たちの生の本態とは乖離したものとなる。プロジェクト活動は、あらかじめ見定められた目的に還元されない。私たちは前分節的な専心活動において、「何かに気づいていながら、何に気づいているのか、はっきりわからないままに何かをはじめ、次第に自分が漫然と気づいていながら理解していないものに、近づいていく」(p.149) のである。

### 3. 「存在論的な地平」への肯定的言説を問い直す

「専心」「共存在」「前分節的」という三つの特徴をもとに、本書が描き出す存在論的な地平について説明を試みた。ここからは、『プロジェクト活動』で指し示された地平に関して、同書において明示的には説明されていない観点を踏まえつつ、検討を加えたい。この考察は、本書が明らかにしてきたプロジェクト活動の意義を否定するためのものではない。そこで肯定的言説をいま一度問いなおすことを通して、存在論的な地平につらなる本書の記述を少しばかり補完する。ここでは筆者と同様に「人を支える基礎存在を語る言説」としての存在論の立場を取りつつも、説明されてきたような存在論的契機が欠如しているように思われるケースについて、論を展開する。ここで議論の俎上に挙げられるのは——存在論的な地平を説明づける先ほどの三つの特徴に対応して——次の三つ、すなわち「専心」的でない状態、「共存在」が見失われている状態、「前分節的」であることから

距離をとらなければならない状態（つまり明示知として言語化の必要に迫られた状態）である。

### 3-1 「専心」 欠如の状態

よりよきものを目指す敢然性は、専心活動の核であり、私たちの生を倫理的に基礎付けるものであった。たしかに、「人が専心的であるかぎり、その活動は敢然的である」(p.158)かもしれない。しかし、「プロジェクト活動」において、あるいは別の事態においても、「専心」が失われることがあるだろう。そのような場合に際して、私たちはいかにして敢然性という「よりよい生への意志」を保つことが出来るのであろうか。私たちはこの「専心」の欠如の様態について目を逸らすわけにはいかない。なぜなら、筆者が示唆しているように、専心(あるいは「道具性」)が失われたとき、有用性志向が顔をもたげ支配的な優位をふるうからである(p.176)。そしてなにより、専心活動は、そこで不可避免的に付随する「生の体験」がゆえに、常に挫折と中断の危機に晒されている。すなわち「専心」とは、プログラム化されていない「絶えざる試行錯誤と、揺動苦悩に満ちている過程」(p.83)であるがゆえに、そこでは、自己がそれまで保っていた世界への一体的な没入状態を喪失する契機が不可避免的に伴う。取り組みが上手くいかず苦しむとき、対象と自己との乖離を痛感せざるをえないように。

いずれにせよ、「専心」という営みは、日常的に保証されそこに人が安住できるものなどでは決してなく、その都度その都度、人が世界に対して取り結び直していかなければならない関係性なのであろう。「不安」「倦怠」「疼き」など一部の思想家によって論じられている生における不全感を扱ったモチーフは、そのことを端的に表している。

そしておそらく、そのような不全感のなかでこそ「共存在」として共に生きる他者への「愛他の営み」が、生の本態として私たちを支える。そして同時に、他者から自身の存在を感受されることによって、人の生やそこで学びは根本から支えられるのである。筆者が終章で繰り返し言及していた「愛他の意志」——それは「共存在」として私たちが持つ倫理的衝迫であった——、これこそが専心活動を基礎付けるとともに、その活動の挫折においてなお私たちの生を再び「専心」へと導く敢然性を可能にするのである。

### 3-2 共存在／根源的な単独性

しかしながら、私たちの「共存在」としてのあり方は、果たして自明なものだろうか。「共存在」というあり方を、私たちの倫理的衝迫を可能にするものとして描いてしまってもよいのだろうか。筆者(田中)自身、他のいくつかの論稿において、「脆弱な単独性」という「生の悲劇性」が他者への配慮を可能にするということ<sup>7)</sup>、そしてそういった「生の悲劇性」を理解することの必要性を述べている<sup>8)</sup>。そこでの論旨に従えば、脆弱な単独性という生の原風景をつきつけられたときにこそ、私たちは他者とのあいだに連帯感・親密性を抱くのである。私たちはときに、他者との越境不可能な隔たりを感じ孤独に悩む。そしてその根源的な単独性への気づきのなかでこそ、他者との愛他的関係が可能になると説明されている。それは、他者との絶対的な断絶を生を根源においている点において、デュイー-ハイデガー的<sup>9)</sup>というより、レヴィナス的な他者関係についてのアイディアのようにも思われる。

倫理的衝迫を可能にするものは——すなわち私たちの生を支え基礎づけているものは——、果たして、私たちの「共存在」としてのあり方だろうか、あるいは生の根源的な「悲劇」としての「単独性」であろうか。この問いは看過しようがない。生の根源に「共存在」を見るか「単独性」を見るか、という視座の差異はあまりに大きいように思われるのである。どのようにすれば、対立的に思えるこの二つのモチーフを統一的に考える可能性を提示できるだろうか<sup>10)</sup>。

この課題を考えるにあたってまず、「共存在」概念についてのハイデガーの記述の一節を引こう。

現存在が孤独にいるありさまも、世界の内の共存在である。相手が不在であることは、共存在において、かつこの共存在にとってはじめて可能なことである。孤独にいることは、共存在の欠如の様態であって、それが可能であるということが、すでに共存在を証立立てている<sup>11)</sup>。

これによれば、「孤独」もまた「共存在」を前提とする。人間が他者と共にある存在であるという言明のうちには、人間が他者と「共にない」存在でもありうるという可能性がつねに含意されているのである。言語の本質的機能は分節化であると言えよう。



全体に切れ目を入れその一部を対象化する言語の働きは、対象を明示的に表象するとともに、切り取られた対象の外部を暗黙的にたちあらわせる。逆に言えば、人間が根源的な孤独のうちに歩んでいるという言明のうちにもまた、そうした単独性の外部——例えば他者との協同的關係——が同時に示唆されているのである。すなわち、「単独性」は「共存在」というあり方を前提としており、「共存在」的視座もまた「単独性」を前提としている。

「共存在」あるいは「単独性」いずれの立場をとるにせよ、そこで人間の生の根源に見出されるものは、他者との関係である。両概念はともに、人の生の抜き差しならない現実に他者関係という切れ目を入れ対象化することを通して、他者との連関と断絶という表裏一体の「二つ」の根源的な事態を顕にするのである。

このように考えるとき、ハイデガーの言う「共存在」は必ずしも、私たちが他者との愛他的行為のうちに生きていることを説明した言葉ではないように思われる。それはむしろ、私たちの生が、端的に他者関係——繋がりを保ちつつも、同時に隔たった関係——そのものに根ざしてあるということを言い表した概念なのかもしれない。

この理解が正しいのであれば、「共存在」というあり方は、決して私たちの生の根源的な孤独を拭い去るものではない。この概念はむしろ、単独性という己自身の固有な生の可能性を私たちに開示する<sup>12)</sup>ことによって、手にしたと思っては絶えず私たちから逃げ去っていくような他者との愛他的関係を、幾多の揺動苦悩と孤独をも前提としながら敢然的に目指す契機を私たちに与えるのではないだろうか。

### 3-3 分節化の必要——表象に収まらない過剰を

「共存在」と同様に、「協同性」もまた、他者との具体的な相互扶助的な関係を保証する概念ではない。「協同性」は、人と人との関係性のうちに暫時的・局部的に顕現しつつも、なお達成されていない「予感」(p.160)として留まらざるをえない。そしてそれは、分節化されようとする限り、すなわち概念として把持される限り、「不在の概念<sup>13)</sup>」であることから逃れることは出来ない。なぜなら、たとえ協同性が私たちのうちに暫時的に実現されるとしても、それは専心的な他者関係のただなかで成立しているとい

う意味で、表象不可能である。確かに事後的にであれば、没入的に経験した「何か」を特定の概念として言語化することは「可能」である。しかし私たちは、地表に落ちてくる流星の炎を目撃したとしても、その落下した隕石を取り上げて「これが流星〔そのもの〕だ」と言うことは出来ない<sup>14)</sup>。自らの手前に存在するのは、もはや熱を帯びていない「ただの」岩石である。事後性あるいは分節化は、体験の極度の縮減を意味するのである。

ことは「協同性」概念に限らない。著者の一人である田中智志が別の著作で述べている言葉を引こう。

私たちは、(中略)生の現実をそのまま言語化することができない。いいかえるなら、私たちが現に生きているアクチュアルな生〔「いま・ここ」の生〕は、「アクチュアルな生」として概念化されたものから、根本的にずれている<sup>15)</sup>。

本書で描き出されている存在論的地平をめぐる言説は、本来的に前分節的な私たちの「情況」のうちに立ちあらわれる現象を、分節化された表象<sup>16)</sup>言語を用いて語らざるをえないというディレンマのただなかで言葉を紡ぐ。ニーチェの「人生というものを像として描くという課題は、それがどれほどたびたび詩人や哲学者によって立てられたとしてもやはり無意味である」(p.69)という言葉に抗して、あるいはそれを引き受けてなお、「いかなる「像」にも、したがって表象にも収まりきらない過剰」(p.74)としての生を、私たちはどのように描くことが出来るだろうか。たとえそれを表象することが、他者や世界との専心・協同的な経験の豊穡さを極度に縮減せざるをえないとしても。

専心活動としてのプロジェクト活動は、協同性に彩られた存在論的思考の次元を開く。言い換えれば、プロジェクト活動そのものが、形式化を絶えず拒絶し命題化を逃れ去る前分節的な営みである。

そしてなによりも、プロジェクト活動について語る言説は、形骸化した表象知へと滑りおちる危険を常にはらんでいる前分節的な「何か」を、——まさに本書で試みられたように——様々な角度から語りなおし続けることを通して、機能性・有用性の次元を下支えする生の本態——すなわち存在論的地平を

私たちに指し示す。プロジェクト活動の営みそれ自体も、プロジェクト活動をめぐる言説も、命題化され固定化された意味に留まっては命を失う。それは事後構成的に語り直され続ける宿命を負っているのであり、それこそが挫折を重ねてきた「よりよい生への意志」を目指す教育思想が、それでもなお繰り返し確認され続けなければならない歴史的必然性(pp.172-173)であろう。

### 注

- 1) 本書は共著であるが、必ずしも各章ごとに明確に執筆者が区別されているわけではない。特に区別の必要がある場合を除き、田中・橋本の両者を指して「著者」と記す。
- 2) 「地平」概念については哲学的には様々な含意が存在するが、差し当たって本稿では「特定の観点をとったときにひらかれる視野の及ぶ範囲」と定義する。ここでの「地平」は、言語的に分節化された世界だけに限定されない。
- 3) ひとこと付言する。ハイデガーは西洋哲学における伝統的存在論の解体を企図し、「存在者」と「存在」という存在論的差異を踏まえ、存在者と区別される存在の次元との関わりのなかで生きる現存在のあり方を、新たな存在論として打ち立てようとした。本書によれば、この「存在」の次元によって、他者との「協同性」につながる「共存在」としての私たちのあり方もまた了解される。
- 4) 野矢茂樹(2011)『語りえぬものを語る』講談社、330頁。
- 5) 野矢、前掲書、235頁。
- 6) 本書146頁。
- 7) 田中智志(2004)「ケアリングの存立条件」臨床教育人間学会編『他者に臨む知』世織書房。
- 8) 田中智志(2002)『他者の喪失から感受へ：近代の教育装置を超えて』勁草書房、31頁。
- 9) これは他者関係の根底に「協同性-共存在」を見出す本書の基本的な構図である。
- 10) なお、田中もまた、本稿とは別の仕方、「生の悲劇性」に対して、ハイデガー的存在論による乗り越えを図っている(田中、前掲書、207-216頁)。
- 11) マルティン・ハイデッガー(1994)『存在と時間 上』(細谷貞雄訳)筑摩書房、264頁(ただし、訳文には中村が一部変更を加えた)。
- 12) ハイデガー自身もまた、「共存在」を生基底的概念として明示しつつも、自らの死へと関わる先駆的決意性によって、当の現存在だけが引き受けることのできる「本来的=固有的」な単独の生のあり方が立ちあらわれると述べている。
- 13) 本書133頁の記述を参照。筆者は「完全性」概念を指して「不在の概念」という言葉を用いている。
- 14) マルティン・ブーバー(1979)『我と汝/対話』(植田重雄訳)岩波書店、182頁参照。
- 15) 田中、前掲書、210頁。
- 16) 「表象」は様々な含意を持つ語であるが、本書の「事物についての、言語による命題・言明的な表現」(p.72)という定義に依拠するならば、本書が表象知あるいは表象言語を用いて存在論的地平を描き出していると説明することに差し支えはないだろう。